

## 第6回宮城県震災遺構有識者会議（発言要旨）

日 時：平成26年11月21日（金）  
午後2時から午後4時  
場 所：宮城県庁11階第二会議室

- 1 開会
- 2 あいさつ（平川座長）
- 3 議 事

### ●平川座長

議事の最初は対象施設の個別検討についてであるが、前回いただいた意見について事務局で取りまとめている。それについて御確認いただき、追加の意見があれば発言いただければと思う。では、まず事務局より説明をいただきたい。

（事務局より評価シートについて説明）

### ●平川座長

前回議論を行った「門脇小学校」、「中浜小学校」、「気仙沼向洋高校」の3遺構について追加等の意見があればご発言いただきたい。

### ●長坂氏

「気仙沼向洋高校」のその他の欄について、もし中に入れる形で施設を残すのであれば、消防法や建築基準法上の問題があることについて話し合われ、「門脇小学校」でも中に入れないとするとどのようにするか議論になったと思うが、他の施設についてもかなりダメージを受けていることもあり、もし展示等で中に人が入ることがあるのであれば、「気仙沼向洋高校」と同じ議論が想定される。それについては他の施設についても同じトーンで記載いただきたい。

### ●平川座長

他の施設についても追加で記載いただきたい。

他になければ、今日の検討対象となっている施設について事務局から説明いただきたい。

（事務局より荒浜小学校及び防災集団移転跡地集落内建物基礎群について説明）

### ●平川座長

「荒浜小学校等」については、現在、仙台市でも検討を行っているとのことであるので差し支えなければ奥山市長に状況についてご説明いただきたい。

### ●奥山氏

事務局からも説明があったとおり、「荒浜小学校」については仙台市の震災復興メモリアル等検討委員会で検討を行っている。この委員会は震災遺構の保存のみを検討しているわけではなく、震災の記憶のあり方、子どもの防災教育のあり方等多様な検討を行っており、その中で「荒浜小学校」についても議論いただいた。メモリアル等検討委員会の進捗状況については、現在第9回までの会議を行っており、今年度中に最終の第10回を開催し、その時に報告書をいただく予定となっている。委員会としての報告のとりまとめの状況は7割から8割といったところで、最終的な文言の調整や抜け落ちていないかなど委員の方々と作業を行っている。その中で「荒浜小学校」については現地視察も行い、現状では、何らかの形で保存することが今後の記憶の継承や発信に向けても有意義ではないかとご意見いただいている。しかし、その際に留意すべき点として、ここだけを見て震災の全てが分かるというわけではないことから、仙台市東部の海岸の複数の要素を見られるように、例えば住居跡であったり、現地再建を目指す集落であったり、それらを含めた周遊できるルートを整備し被災地全体を回りやすくするようご提言いただいている。

実際に現地を視察いただいたときの委員の皆様のご感想としては、屋上に行くことによって牡鹿

半島から遠くは新地まで太平洋岸を一望することができ、その全ての範囲において7mの水の壁が万里の長城のように連なって押し寄せてきたという広域性を改めて感じることができるといただいた。

また、「荒浜小学校」は平坦な沿岸部において唯一の鉄筋コンクリート造の多層の建物であり、周辺の住民はここに逃げるしかない場所であった。結果として多くの方をここで救出できたというのは、避難所として有効であったといえるだろう。残念ながら一旦避難された後に帰られた方もおり、それについてはしっかりと検証する必要があるとのことであった。震災前年度の住民の防災訓練の中で、それまで1階に置かれていた物資を、津波がきた場合役に立たなくなる恐れがあるとのことで、3階、4階に移した経緯があった。そのおかげで少ないながらも物資を有効活用できたこともあったので、地域住民が防災施設を自らの訓練の中でどのような弱点があるかを把握していることが一番大事であるということが「教訓」としてある。従って、建物と地域の人との関係性、そこでどのような防災訓練が行われ、どのようなソフト面の変更があったかなど、建物の実物以外の要素をきちんと伝えるという努力と相まって震災遺構としての意味が発揮されるであろうという話がされた。その意味で付近の住居跡は、いかにたくさんの方々が密集して暮らしていたかを示しており、今現地を見ると茫漠とした荒野のようであるが、明らかに暮らしの営みがあった地域で起きた震災であるということも併せて伝える必要があるとのご意見が出された。

●平川座長

仙台市の委員会では、この遺構を残すことは何らかの意義があるのではないかとの方角で議論されている。この場では、当会議として発言いただいて評価シートをまとめていきたい。

●長坂氏

まず「破壊力」については、まさに校舎そのもので、2階まで津波に被災したということと周辺の住居の被害をセットで「破壊力の痕跡」として意義があるのではないかと考えている。「教訓」としては、先ほど奥山市長が言われたとおり、かなりの人数がここで助かっており、仙台平野の裏手に高台がないような場所ではこのような施設を一時避難場所として活用していく。今後も多目的な理由で施設利用をしていくのであれば、緊急的な施設としての活用ということも含めて「教訓」として残していくことが必要ではないか。

また周辺の建物基礎についてだが、まさにこのエリアは災害危険区域ということで、民間の建物は建たないのか。

●奥山氏

防災集団移転事業の跡地ということで概ね市の買い取りが進んでいる地域である。

●長坂氏

そうであれば買い取り後の利用ということで一体的に残していただければと思う。その際は全ての基礎を残すのかは地元で十分に議論いただきたい。一体的な保存によってある種の「鎮魂」や「発信力」にもつながると考えている。

●平川座長

他にはいかがか。

●松本氏

まず「破壊力の痕跡」については、先ほどご説明があったように、2階床上約40センチまで津波に浸水したということで痕跡が色濃く残っている。1階も建具や内部仕上げ、外部の手すりに痕跡が色濃く残されている。屋上からは周辺の住宅地の基礎群を一望できるということで、津波の恐ろしさを感じ取れる。「教訓」については、被災3県には木造住宅が密集して、ほとんどの住宅が流失することで町全体が壊滅状態になった地域が数多く見受けられる。荒浜地区はその典型的な例だと考えられる。荒浜地区だけで800棟近い木造住宅がありそのほとんどが倒壊したということであった。地元の建築構造研究者が木造住宅の津波被害と津波の高さとの関係について調査しており、津波の高さが2m以下の場合はほとんど構造的な被害はなくて、2mから4mでは被害のある

なしが混在しており、4m以上の区域では全壊という結果が出ている。つまり津波の高さが4m以上想定される地域では、例えば1階部分を鉄筋コンクリート造にしてピロティーにする場合を除いて、一般的な木造建築は倒壊する可能性が高いということである。津波被害と浸水深の関係を田中・小川式として提案もされている。阪神大震災では地震により木造住宅が倒壊しており、その後、木造住宅の土台と基礎コンクリートの緊結が弱いということでその基準が耐震の基準とともに見直されているが、同じ水平力といえども津波の「破壊力」は想像を超えるものであることが実証されたと思う。

また同じような地形の「中浜小学校」と同様に避難者が救われたという意味で、平野部の中高層建築物の有効性が示され、また、地域住民や学校が防災訓練をされていたということは「教訓」になると思われる。

「発信力」としては仙台市では唯一の遺構候補であり、特に屋上から俯瞰したコンクリートの基礎群についてはインパクトが強い。そのような意味で校舎と基礎群両方が相まって「発信力」が生まれるのではないかと考えられる。壊滅した住宅地についてはほとんどが盛り土や公有化によってなくなっていることから、希少価値の高い遺構と思われるのでこの地区全体としてどのように遺構として整備していくか、いろいろな事例を参考に工夫されることで、さらに「発信力」が高まる可能性がある。前回検討を行った「門脇小学校」、「中浜小学校」と連携することによっても大きな価値が生まれてくるだろうし、仙台はアクセスが恵まれているという意味でも学校の遺構の拠点という意味でも価値が生まれるのではないか。

#### ●平川座長

沿岸部の住居のあり方についても大きな「教訓」を残すためにも基礎と残すことが大事であるとのことであった。他にはないか。

#### ●牛尾氏

質問であるが、建物の屋上から基礎群が見えることから価値が高いという話がされたが、屋上に上がることはできるのか。

#### ●奥山氏

屋上に上がることは可能であるが、一般の方がフリーに屋上へ入ることはできない。ただし、沿岸部で工事を行っている事業者の方々は、地震が起きて津波警報が出された場合には、バリケードを押し倒して屋上へ避難してほしいと伝えてある。そのような意味で緊急一時避難施設に指定している。また耐震構造上の話であれば屋上に上がることに問題はないが、一般公開をするとすると残し方についてこれまで議論があったように、どこを通路にするかとか安全確保をどうするかとかそれ相応の別途の検討が必要になる。

#### ●平川座長

屋上から一望できるという遺構としてのメリットを生かす為にはまだ検討しなければならないことがあるということだが、この会議では屋上に上がってみるとそのような効果があるということになるとまとめていくことと思われる。

「破壊力」の問題、「教訓」の問題、「発信力」の問題が出され、「鎮魂」についても校舎自体で犠牲になった方がいないが、周辺では非常に多くの方々が犠牲になられ、住宅基礎群でも犠牲になられた方がおるので、それを象徴するような形で「鎮魂」の為の場になるのだろうと思いつける。

これまでも校舎がいくつか候補となってきており、校舎が一番残りやすい建築物であるということが反映していると思われるが、他の校舎との違いは住居の基礎群とセットになっているということが良いか。

#### ●奥山氏

私どもの検討委員会では、そのような点がポイントとして出されていた。

#### ●平川座長

そのような意味では一体としてのゾーンとしての価値が見いだされると考えられる。実際にここ

に住民が逃げ込んで避難場所としての効果を発揮し、現在も工事関係者の避難ビルとしての役割を持っている。そのような避難場所としての価値もあるということになるだろうか。

●長坂氏

3, 4 階については津波の浸水はしておらず、建物全体としての耐震性も保たれているということであるが、残した後の利用については展示以外に地域の施設として活用の予定はあるか。また、将来的には工事関係者だけでなく復興ツーリズム等で来られた方の為の避難場所にもなると思うが、平常時の地域のコミュニティとしての利用は考えているか。

●奥山氏

その辺についてはまだ詰め切れていない。展示施設として来られた方が見るのであれば、上限 1 時間くらいあれば十分ではないかと思うが、2 時間 3 時間活動するコミュニティ施設となると例えばトイレの問題をどうするのかとか、別棟に設けるのか中で再建するのかという問題がある。またコミュニティとして使うとなると、防災集団移転をした地域になるので移られた方々が活動するために東側へ集まることになる。それはちょっと心理的にどうかという問題もある。この残し方については、これまでは町内会長様方は残すことに大きく反対だという声は上がっていないものの、近隣で多くの方も亡くなられており、校庭までは来られたがそこで津波に追いつかれたという方もおることから、やはり平穏な気持ちでは見られないという方もいる。そのようなこともあり私どもがご説明を差し上げて遺構化するというのもう少し待って、検討委員会での検討はするけれども地域の方のお声を聞くというのは控えさせていただいていたという経緯があった。これから徐々に町内会役員の方々の話を聞きながら、地域の方々の話を聞いていきたいと考えており、コミュニティ施設というのは、物理的な問題も含めながら、まだペンディングの部分がある。

●平川座長

ここは非可住区域であるからコミュニティ自体が成り立たない地域であるので、ここへ訪れる方のための対策がどうなのか、その一つの手段としてどこまで活用できるか市で判断していくのだろうと思う。私どもの会議ではここを遺構として見たときに、十分に価値があるとのこと意見をいただいたと思う。そのような方向でまとめていただきたい。

続きましては、「南三陸町防災対策庁舎」について事務局から説明願います。

(事務局より「南三陸町防災対策庁舎」について説明)

●平川座長

現状と最近の動きについてご説明いただいた。今朝の河北新報で南三陸町の職員の方が防災対策庁舎以外の遺構候補について検討をしているとの報道があったが、それについては何かあるか。

●事務局

座長からお話があったように、本日河北新報の朝刊で、「南三陸町遺構候補に旧戸倉中町検討チーム 7 カ所を町長に報告」という見出しで掲載がされた。こちらについて、電話により担当者へ確認した。町内で保存可能な遺構候補の検討を行ってきたところで、今後、本当に保存が可能かなど具体的な検討を行っていくとのことであった。候補としてあげられたのは 7 つで、JR 気仙沼線歌津駅、伊里前川のウタちゃん橋、JR 気仙沼線清水浜駅、清水浜駅付近の鉄道の橋脚、JR 気仙沼線志津川駅、志津川駅駅前広場、旧戸倉中学校と伺っている。今後の検討状況によって今挙げた遺構候補 7 カ所に追加がされる可能性もあると伺っている。

●平川座長

そのような動きもある中、「南三陸町防災対策庁舎」についてはこの会議に町から検討を預けていただいているということで、今の動きからは除外されているということだと思う。では評価シートに沿ってご意見をいただければと思う。

●鈴木氏

我々行政を預かるものとしては「南三陸町防災対策庁舎」については非常に関心がある。行政は

まず住民の生命と財産を守るのが最優先の課題である。そのために行政職員が自らの命を省みず避難を呼びかけ、命を落とされたというのは非常に痛恨の極みである。これを「教訓」にして我々首長はもちろん住民の生命や財産を最優先にして、併せて職員の生命と財産を守る必要性をこの遺構から感じ取っていただければと思う。町長以下 11 名の方々が生還されたのは屋上の無線塔にしがみついて何とか助かったという話であるから、そういった意味で職員への対策について、我々は「教訓」にして、災害対策に取り組んでいかなければならないことから、ぜひこれを全国の皆さんに示してほしいと思う。

#### ●平川座長

自ら逃げることをせず避難を呼びかけたというのは、非常に尊い犠牲であったと思う。やはりこれからはそのような犠牲をできるだけ少なくすることが必要であると考えている。警察や消防団員のように自ら津波の現場に入っていったことによって命を落としたことについて、それをどのようにしていくかというのは検討をされているところであるが、この「南三陸町防災対策庁舎」はそれを象徴するようなものであり、「教訓」となっている。他にはいかがか。

#### ●長坂氏

行政施設の安全な立地のあり方については全国的にもまだ十分議論が進んではいない。職員の生命を守り、そして災害対応、危機管理を行っていく行政施設の立地のあり方を問いかけるものであり、「教訓」としての力は強いと考える。人類史上の集合的な記憶という意味でもこの3、11について一番問いかけをしていく力が強く、「発信力」も非常に大きいと思われる。

八幡川の河川の遡上というのもどこまで考慮しておられたかということも含めて、防災対策庁舎が建てられた経緯をもう一度検証して、併せて情報発信していくことが必要になる。周辺は4mの盛り土をされ公園になるということであるので見た目の問題もあると思うのだが、うまく工夫していただいて公園として「鎮魂」にも考慮した形で、地元で検討いただければと思う。

#### ●平川座長

他にはいかがか。

#### ●松本氏

「破壊力の痕跡」として、内外装材が全て流失しており、鉄骨の骨組み、間柱の一部、鉄骨の階段が残されているという姿が津波の「破壊力」を強く示している。また間柱や階段が反対に折れ曲がっているというのは非常に衝撃的な印象を与える。

「教訓」としては防災拠点となるべき公共建築が被災するというのは、今回の津波が非常に想定外であったということもあるが、立地をどこにどのように建てなければならぬか熟慮させるものであるという「教訓」がでてくる。他の被災地でも外装材や内装材が流れて主要な柱だけが残ったという例がたくさんあるのだが、特に鉄骨造ではそのようなことが多かった。内装材が流出した跡は建物の中を津波が通過するので、かかる力が弱くなる。そのようなことで主要な柱が守られる。今回は予想外の津波の高さで非常に多くの方々が亡くなられたが、建物構造自体は無事であったということで、屋上で助かった人というのは「教訓」なるのではないか。2010年のチリ地震でも、その後復興したコンスティトゥション市という都市では、もちろん防災林等を整備した上での話ではあるが、万が一に備え低層部の壁を壊す構造にして主要な部分を守るようにしている。

「発信力」についても非常に大きなものがある。全国的にも発信されて、先ほど説明にもあったとおり埼玉県のもとの道徳の教材にもなったという、女性職員の命がけ呼びかけが多くを救ったというのが大きい。建築的に見れば非常にシンプルでコンパクトだということで、非常にモニュメントとしての性格を持っており、そのようなことも「発信力」として評価できると考えている。

参考意見としては、戦争の悲劇を伝えている広島県の「原爆ドーム」は当初は保存に反対する意見も非常に多かったが、その20年後に16歳で亡くなった高校生の日記がきっかけとなって保存を決定しており、非常に時間がかかっている。50年後に国の史跡の指定を受けて、その翌年に世界遺産になっている。この建物は非常に多くの報道がされて東日本大震災の被災地の悲劇を伝える存在である。当然犠牲者の家族や住民の方々の心情への配慮が十分に行われるべきであるが、減災や防災を伝える非常に貴重な財産として、未来の教育の為にも国を挙げて残すべきだと考える。家

族や住民の方々の気持ちは分かるが、時代とともに遺構に対する考えが変化するかもしれない、時間の要素も考えて例えば10年ごとに見直しというような、時間軸も含めたシステムのようなものを考えてもらい、この貴重な遺産を解体されることのないように、禍根を残さないようにするべきだと思うほどに価値があると考えている。

#### ●平川座長

広島の「原爆ドーム」の話がされたが、この「南三陸町防災対策庁舎」は「原爆ドーム」に劣らないインパクトを印象として与えてくれるだろうと思う。しかも、今まで学校施設についての検討がいくつもあったが、それと比べたときにこの遺構は骨組みだけでありその点でも強烈である。さらに津波犠牲者にはなるが、様々な災害犠牲者の慰霊の為の象徴的な役割もこれからは果たしてことになるのではないかと。世界的な慰霊の場、災害の現実を知ることができる場、「原爆ドーム」と同じような、あるいはそれ以上の価値を発信していくことができるのではないかと、私自身も認識をしている。

なお、先ほど「荒浜小学校」のところでも紹介するべきであったのだが、木村氏から「南三陸町防災対策庁舎」についての意見を預かっている。それをご紹介させていただく。

「破壊力」については、津波の破壊力のすごさが外観から知ることができる貴重な遺構である。また鉄筋コンクリート造の「高野会館」と比べて、鉄骨造の弱さが分かる。

「教訓」については、今回候補となっている遺構の中で行政機関の施設が対象となっているのはこの庁舎のみである。災害時の応急活動の基地となる役場庁舎が被災したことによって、災害対応業務がマヒ状態に陥ったことが大きな教訓となった。つまり行政関係の施設の震災対策の重要性が明確になった。

「発信力」については、既に東日本大震災を象徴する遺構となっている。今回の候補遺構の中では世界的に見ても知名度の高い震災遺構といえる。

「鎮魂」については、現在、地元をはじめとして多くの方が献花に訪れており、当遺構、南三陸町、さらには東日本大震災の全ての犠牲者を追悼する場になっている。

またさらに、遺族の中には、家族が最後まで災害対応にあたった場所として保存を臨む声も多くなってきているという。このような声を無視すべきではないと思われる一方で、思い出したくないという声もあり、保存には工夫が必要である。この遺構は、既に南三陸町に限らず世界的な遺産になっており、保存に向けて最善の方法を模索することが求められている。これまでの経過から町役場による保存が難しいようであれば、宮城県あるいは第三の団体が保存事業を実施する必要がある、という意見も出されている。

これも遺構評価の意見として事務局にまとめていただく。他に意見はないか。

#### ●太田氏

皆様がおっしゃったように「破壊力」、「教訓」、「発信力」、「鎮魂」の全ての項目について評価できる遺構だと思う。ここで考慮しなければならないのは、遺族の方の気持ちの配慮がどうしても必要になる。その時にそれに対して説得力のある説明ができればと思う。それについて少し思いあたることがあるのだが、私の活動している石巻市で地元の石巻日日新聞社が震災の跡に作った手書きの壁新聞を展示しているスペースがある。2年前の11月に開館してこの11月でちょうど2年になるが、2年間の来館者の数が2万人を超えたという話を聞いた。そこで思うのはその2万人の方というのは、初めて来る方ばかりではなくて、何度も訪れる方、ボランティアで来られた方が定期的に様子を見に来られるとか、リピーターの方も多いと聞いた。そこでぜひ「南三陸町防災対策庁舎」について考えるときに検討していただきたいのは、もし庁舎がなかったときに南三陸町へ訪れる方がどれだけ少なくなるかということも想定して考えてはどうかと思う。先ほど松本氏も財産として、というようなことを言われたが、この防災庁舎があることで地域間の絆、震災の時に生まれた支援の絆が今後も続いていくきっかけになるかもしれないということ、データを持って検討していただければと思っている。

#### ●鈴木氏

「鎮魂」についてだが、南三陸町長は遺族の方の心情を考えて解体を決めたと聞いている。しかし、最近ではこの遺族の方は命日には必ずお参りにきているというような話を聞いた。逆にこの庁

舎を解体したら、遺族の方が追悼するよりどころが無くなるのではないかと思う。その意味でも「鎮魂」ということを考えるとこの庁舎は残して後世に伝える、それが一番の遺族の方に対して応える形になるのではないかと考えている。

●平川座長

現在も、鎮魂慰霊の場として非常に大きな役割を果たしている。防災庁舎の前に行くとき自然に手を合わせざるを得ないような心境に全ての方がなるだろうと思う。「原爆ドーム」も考えてみると、「原爆ドーム」のない広島はもう考えられないような状態になっていると思う。戦争の遺構として世界的な価値を持っている。その「原爆ドーム」を訪ねてくる人が国内だけでなく、世界中におられる。さきほど太田氏から「南三陸町防災対策庁舎」があることによって来訪者が多くなっているとの意見が出されたが、これが今後遺構として残されていった場合、防災庁舎の無い南三陸町は考えられないといったような状態になっていく可能性もあるのだろうと考える。そのような意味でも評価の項目、「破壊力」、「教訓」、「発信力」、「鎮魂」のすべての項目で非常に強い要素を持っているということだと思う。他には意見は無いか。

●長坂氏

私も被災当時のまだ消防庁舎等が残っていた時期に現地で見させていただいた。その頃は、町長に対する責任論のような声もあった。現町長はある意味当事者であり、保存については、遺族との関係もあり厳しいものと考えられる。そこで木村氏の言われたように、土地も建物も含めて例えば財団等、国も一定程度、県も交付金等を活用しながら残していくという議論をして、自治体から切り離して保存する仕組みを検討することも考えられる。保存に反対の立場の遺族の方々の心情も考慮し、先ほど松本氏からも提案されたようなモラトリウムを置き、10年ごとに合意形成を図るといったようなことを含めてやっていかないと難しい状況にあると思う。もし基金を積むなど、そういったことになれば個人的にも縁もあるので、ご協力もしていきたい。

●平川座長

木村氏の指摘に加えて基金化、例えば財団等の話もされた。運営主体はどこかというような議論もあるが、今いただいた意見は「その他」の欄に加えさせていただきたいと思う。他には。

●鈴木氏

財政力の小さな市町村では長期の保存については非常に耐えがたいものがあり、そういった点も解体を決めた一部の理由となっていると聞いている。しかし今まで検討した他の遺構と比べれば、そのまま残すことについて比較的経費をかけないで保存できるのではないかと思う。平川先生方からも話もあったように、南三陸町に負担をかけない形で、民間からのお金も含めて、我々国民が保存しようと気運が高まるような、広島「原爆ドーム」のような貴重な遺構なるのではないかと考えている。

●平川氏

解体論の根拠として、遺族の心情への配慮とともに財政負担に耐えられるのかということもある。そのような点では、財政上の問題について様々な点から考えて、保存の可能性について検討する必要があると当会議でいただいた意見としては大事な要素であると感じる。このような意見が出されたのは「南三陸町防災対策庁舎」が初めてだと思う。

●牛尾氏

「南三陸町防災対策庁舎」を保存するというのは、東日本大震災を風化させないという、宮城県民、日本国民の意思の表れだと思う。早急に判断を決めるのではなく、松本氏も時間をおいて議論を継続させていくべきだと言われたように、大きな意思の表れとして保存について検討を行うべきだと考える。

●平川座長

遺構を残すことによって、震災の風化を少しでも押しとどめたいというような意見であった。現場に行かなくても写真や映像でもインパクトはあるのだが、現物が無くなってしまうと大きく影響力を失ってしまう。それぐらい影響力が大きい。他にはいかがか。

●奥山氏

残るべき価値が高いというのは、構成員の皆様の多くの意見であると拝聴し、私自身もそのように考えるところである。しかしながら、町はこの間残すべきという考えと、対して課題があるとの考えで町も議会も非常に苦労されてきた、判断を迫られてきた結果、町を二分、三分するような厳しい状況を抱えることになったことから、少なくとも時間を置いて議論をするにしても、それが町のご苦労をさらに長引かせるような時間にならないようにどうしたらよいか、例えば県が主体的に節目において精査を行うというようなことも含めて、今後の時間を誰の責任において見守っていくのかというのを、他の遺構については必要ないとは思いますが、ある程度この遺構については考えていくべきである。また経済的な面、科学技術的な面の検討を行わなければならないかもしれず、その費用や主体についてしっかり踏まえて可能な選択できる方式を提言することによって町の負担にならないような遺構のあり方を考える責任があると考えます。

●平川座長

「南三陸町防災対策庁舎」については、さらに踏み込んだ提言を行っても良いのではないかなという意見であった。木村氏、長坂氏からは県の関与や財団を作ったかどうかというような意見が出され、奥山氏からも他の遺構とは違う扱い方というのも考えても良いのではないかな、その中で県の関与も考えてはどうかという話がされた。どうやって残していくかというのは、技術的な検討をすると相当手を入れなければならないと思うのだが、そこで県の側がどれだけサポートできるかということだと思う。そしてそれは当面のことだけではなく維持管理も含めての話になるだろう。そのようなところで「南三陸町防災対策庁舎」については一歩二歩踏み込んだ提言にしていくことによろしいだろうか。

(賛同の声)

●平川座長

この防災対策庁舎は「破壊力」、「教訓」、「発信力」、「鎮魂」全ての項目について非常に高い意義を持っていると総合評価にまとめていくことになると思う。また保存管理の仕方については、意見の欄に、県が何らかの形で関与していくことが望ましいとの形で明記をしていくという扱いをしていきたいと思えます。

また「荒浜小学校」についての木村氏の意見について改めて紹介させていただきたい。「破壊力」については、2階のバルコニーなどの破壊に加え、周辺集落の基礎群に破壊の痕跡が明確に残っている。「教訓」は平野部における避難ビルの必要性が明確になった。また他にも候補となっている遺構の中で学校と集落がセットで残っている場所はここだけであり、きわめて貴重である。住宅の基礎群は、津波はそこにあった生活や伝統も破壊するということを知る上で貴重である。仙台駅、仙台空港に最も近い遺構としてアクセスが良く、多くの人にPRできる可能性がある。保存にあたっては、学校とともに歩んできた被災前の荒浜集落の歴史文化を知らせる。また津波が来たときの様子、なぜ多くの人々が犠牲になったのかなどが分かるように工夫すべきと言える。さらに荒浜地区の住民の被災後の生活再建の軌跡についても資料として公開してはどうか。大規模な集落遺構の管理、維持費などについては今後の大きな検討課題であるというような意見を出されている。

他に補足でご発言は無いかな。では今回出されたご意見を取りまとめさせていただいて、次回総合評価を決めていきたいと思う。